

春先の気温変化に対する農作物管理について

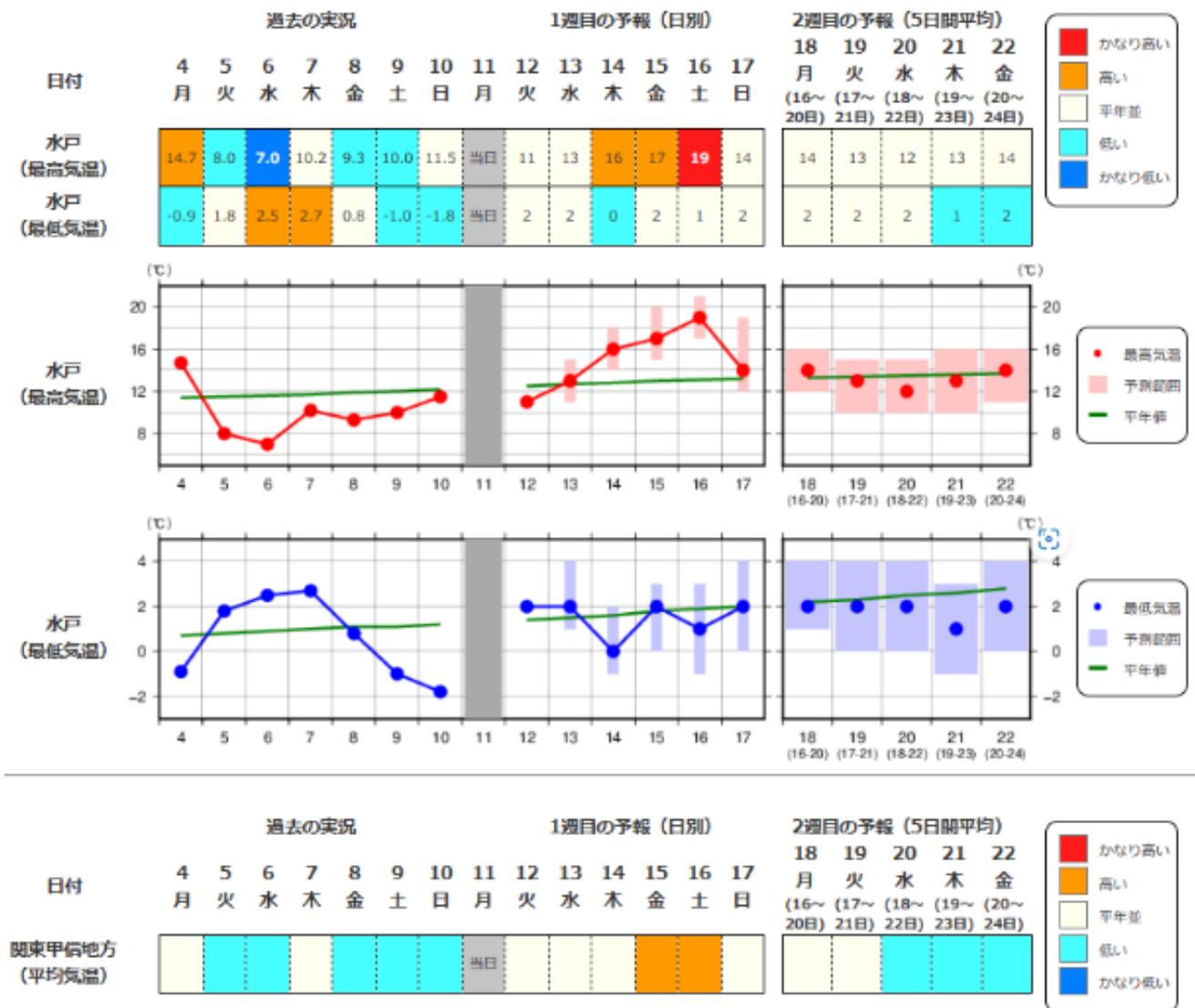
農業総合センター
専門技術指導員室

●気象情報

水戸気象台発表による月間平均気温によると、11月は平年よりも+1.5℃、12月は+1.5℃、1月は+1.7℃、2月は+1.3℃と気温が高めの状態が続いています。また、気象庁発表による向こう1か月の季節予報や2週間気温予報によると、今後も平年より気温が高くなる可能性が高い一方で、急激な気温低下や降霜・降雪、それに伴う障害の発生も懸念されます。

最新の気象情報の把握と共に、作物の生育状況を丁寧に観察するよう努め、農作物の管理に十分注意してください。

【茨城県の2週間気温予報（2024年3月11日5時更新 気象庁ホームページより）】



●対策技術

I 共通事項

- ・高温が続くことにより、農作物の生育が早まることが予想される場合は、作業計画の見直しや肥料・農薬等資材の確保に留意する。また、県病害虫防除所の病害虫発生予察情報等の最新の情報収集に努める。
- ・急激な温度上昇により、軟弱徒長気味に生育した農作物は、寒気の一時的な南下による凍霜害が発生しやすくなるため、予め対策を検討しておく。

II 普通作

1 水稲

- ・気温が高いと、浸種日数が例年に比べて短くなるので浸種日数に注意する。なお、芽出しは「ハト胸」（芽が1mm出た程度）にとどめる。
- ・水温が高いと細菌性病害が発生しやすくなるほか、早期の発芽により計画的な播種が出来なくなる恐れがあるので、水温が15℃以上にならないように水の交換を1日1回行う。
- ・平置き育苗では、出芽までの期間にハウス内の温度が30℃以上にならないよう換気に努めるとともに、遮光シートや反射シートなどを活用し「苗ヤケ」防止に努める。特に、ビニル等を新しく張り替えたハウスや被覆資材のかけ過ぎは、高温による「苗ヤケ」が発生しやすくなるので、温度管理に特に注意が必要である。
- ・育苗期における高温・高日射条件では、もみ枯細菌病等の病害や苗の徒長が発生しやすくなるため、高温・多湿にならないようハウスの換気を行う。
- ・緑化・硬化期に高温（35℃以上）・多湿になると、リゾプス菌などによる苗立枯病が発生しやすくなるので、高温にならないように注意し、かん水する際は、水のかけ過ぎに注意する。

2 麦

- ・播種直後の11月から続いている高温傾向によって、平年よりもかなり生育が進んでいると共に、草丈や茎数等の生育量も大きくなっている。倒伏を助長しないよう、追肥窒素量や施用時期については、生育量に加えて葉色、地力等を考慮して行う。
 - ・春先の一年生雑草が一斉に出芽するため、発生が確認されたら、速やかに茎葉処理剤を散布する。なお、麦の生育が早いため、使用可能な晩限を過ぎていないか十分に注意する。
- ※3月上旬現在、11月上旬播種の麦類は平年よりも9～11日程度生育が進んでいる。今後も高温傾向が続けば、出穂期も早まることが予想されるため、赤かび病防除等の管理作業を適期に実施できるよう、生育状況の観察に努める。

III 野菜

1 露地野菜

(1)作物共通

- ・苗の定植に際しては、降雨が少なく土壤の乾燥が続く場合には、降雨後の定植や苗の活着促進のために定植後に株元へのかん水を行う。
- ・トンネル栽培においては、換気不足により内部が多湿になりべと病・菌核病等の発生や、高温による葉焼けや軟弱徒長が発生しやすくなる。トンネル内温度に十分注意して管理を行う。

(2)ネギ

- ・越冬ネギは、早期に抽苔する可能性があるため、必要に応じて軟白部内部の花芽分化の確認を行い、適期収穫に努める。

(3)レタス・ハクサイ

- ・収穫遅れによる規格外品（過熟、抽苔等）の発生を抑えるため適期収穫に努める。
- ・気温が高く推移するとアブラムシ類・コナガ等の害虫発生が前進化する可能性があるため、早期発見・早期防除を心掛ける。

2 施設野菜

(1)作物共通

- ・気温や日射量の増大に伴い、ハウス内温度が上昇し吸水量も増加するため、作物の萎れや葉焼け症状、果実障害、果実品質の低下が発生しやすくなる。週間天気予報を確認しながら、適正な温度管理及び灌水管理が重要となる。
- ・育苗ハウスでは、葉焼けや軟弱徒長の発生に注意し、定植期は植え傷みの発生に注意し、換気や午前中を中心としたかん水、定植後の株元かん水など適正管理に努める。
- ・生育期・収穫期の圃場では、必要に応じて日中に遮光カーテンや遮光資材を展張するとともに、こまめなかん水を行う。
- ・換気作業は、晴天や強風時の乾燥条件下では、急激な温湿度の変化で萎れが発生しやすいため、一度に開けず、複数回に分けて段階的に換気することが望ましい。
- ・循環扇を利用し、施設内の温度ムラを解消する。
- ・気温が高く推移するとアブラムシ類、ハダニ類、アザミウマ類の害虫発生が前進化する可能性があるため、早期発見・早期防除に努める。ハウス周辺の除草、老化葉の葉かきも重要である。

(2)イチゴ

- ・高温による果実温度の上昇を最小限にするため、十分な換気を行うとともに、必要に応じて遮光資材を展張し施設内の温度を下げる。
- ・草勢が強くなりすぎると、乱形果や障害果が発生しやすくなるため、低めの温度管理を行う。最低温度は厳寒期より1～2℃低めに管理し、日中は20～23℃程度で換気する。追肥も草勢や葉色を見ながら少量ずつ施用する。
- ・かん水不足は、果実色の黒ずみや食味低下の原因となり、かん水過多は、果実の糖度低下の原因となるため、着果や葉の伸長状態に応じてこまめなかん水管理を行う。土壌水分は、pF1.8（いばらキス pF 1.9）を目安にかん水を行う。
- ・高設栽培では、水分不足にならないよう、排液量を確認しながら給液を行い、給液の回数や量を調節する。また、培養液は定期的にECやpHを測定し、異常がないかチェックする。
- ・気温上昇に伴い、収穫量が多くなるとともに、過熟果や果実の傷みが発生しやすくなる。品質保持のため、食味を損なわない程度にやや若採りをしたり、収穫間隔を短くしたりする。また、できるだけ気温の低い時間帯に収穫し、収穫後は速やかに予冷を行い、果実温度5℃を目標に品温を下げ果実を固くしてから選別を行う。
- ・親株育苗ハウスでは、乾燥し過ぎないように注意し、午前中を中心にかん水する。

(3)葉物類

- ・収穫遅れによる規格外品の発生を抑えるため適期収穫に努める。
- ・多湿条件では、べと病やニラの白斑葉枯病など、病害が発生しやすくなるため、適宜換気を行わない、ハウス内の適正な温湿度管理に努める。

IV 果樹

- 発育が平年より進む可能性があるため、せん定や花粉確保などの管理作業は、計画的に実施する。
- 発芽前の休眠期防除は時期が遅れないように注意し、温暖無風の日を選んで確実に実施する。
- 生育が早まると凍霜害発生の危険性が高まるため、今後の気温の推移に注意して、防霜資材は早めに準備する。また、地温を高めて凍霜害発生を防ぐために、既に樹冠下にある敷ワラは除去する。なお、新たに敷ワラをする場合は、凍霜害の発生がなくなる5月中旬以降に行う。

V 花き

- 日差しが強くなってきており、晴天時には外気温が低くてもハウス内が高温となりやすいため、目標の温度に応じてこまめな換気を行う。また、土壌水分管理にも注意し、必要に応じて適宜かん水を実施する。
- アザミウマ類やハダニ類、白さび病等、病害虫の発生が前進化する可能性があるため、ほ場内の残渣や雑草を適切に処理し、観察を怠らず早期発見、早期防除に努める。